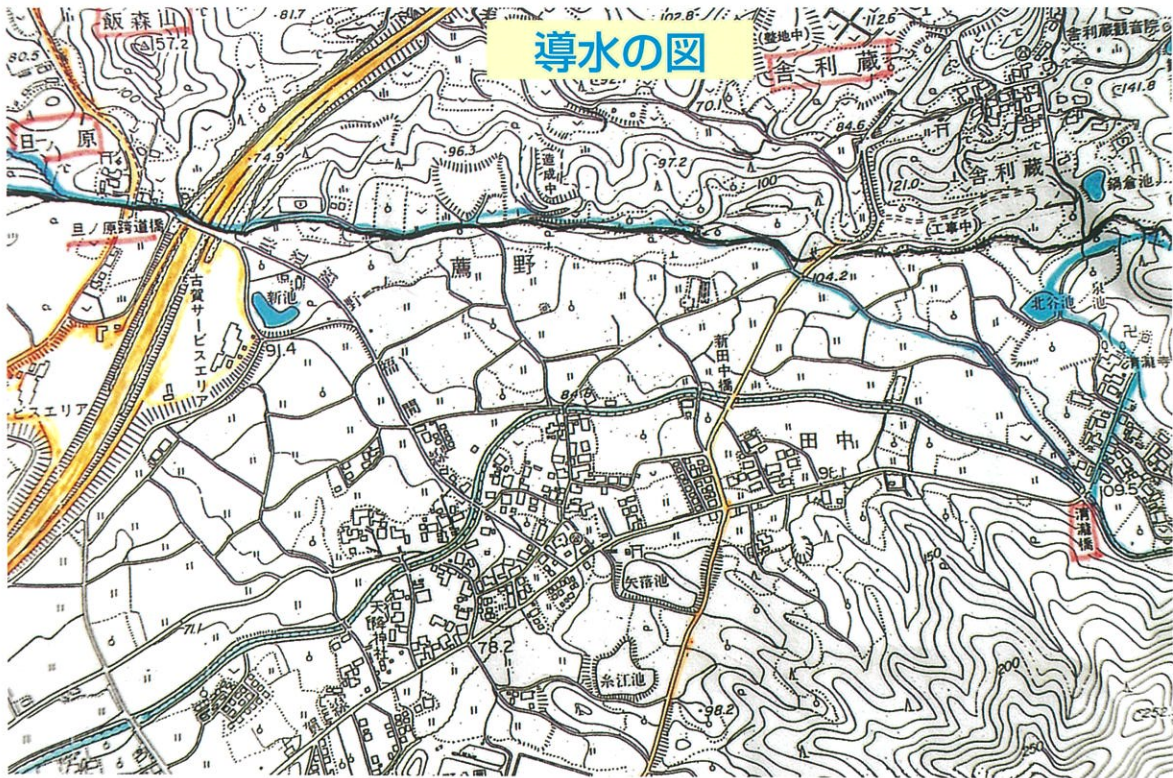


『清瀧仕掛け水』

庄屋・井原権六、清瀧水路の導水、今も生活の支え



近くに上原水路もある。本谷を掘削し北谷池へと導水している。(約八百米) 水色の水路は殆ど農水路を拡幅してできており、福津市の大森上池へ流れている。

取水口は清瀧橋下にあり川の両側は桜並木がつつく。青色の仕切り板が目を引き、郡境に沿って水路が掘られている。



病虫害や早魃（日照りの害）が多かった江戸時代、農民の頭痛の種は水の確保でした。

清瀧仕掛け水は下西郷村（現福津市）の庄屋、井原権六が当時の福岡藩屈指の郡奉行、富永甚右衛門に清瀧より水引きを願いが出されたことが発端でした。

そして甚右衛門の指導により、明和9年（1772）4月清瀧川より上西郷村柳井池までの水路が完成しました。またその後、上西郷村庄屋、篠崎半八も藩に願い出て文久2年（1862）12月上西郷村に大森下池を作り、清瀧水路の水を分けて引くようにしました。これが清瀧仕掛け水路と呼ばれるものです。



福津市舍利蔵の集落に向かう旧道の左側大行寺原を左に水源の清瀧川を望む。

一抱えもある鉄の通水管は九州縦貫道跨道橋に抱かれて
福津市へ入る



清瀧寺下の取水口から九州縦貫自動車道、国道3号線を跨道橋と並んで設けられた通水管でまたぎ、福津市原町3区にある丘の上の百田池まで約5kmの大水路を作りました。これは幾つもの山や台地を切り拓いての難工事となり、そのため多くの農民が家の仕事を止めて働きに出ました。この頃までの導水工事は土地の高低を乱さないよう

に測りながら水を引くやり方で古賀市内に見られるサイフォン式の導水は近代（明治以後）になって随所に用いられるようになりました。

毎年1月11日から5月15日まで導水され、水及び世話料として米7石7斗6升（約50万円）が福津市から薦野区へ払われています（昭和36年協定）。そのお陰でこの清瀧川の水は今でも久末



福津市原町3区は小高い丘の上であり、かつては山上の大池だったと思われる。（百田池）ここから下西郷の水田地帯へ送水されている。

清瀧川からの水が稲作用の給水路を郡境に沿って流れ、九州道を越え大森上池へ注ぐ、取水口付近。



ダムまで運ばれ、福津市の田畑の灌漑（水^{かんがい}をやること）や、家庭工場用水としてこの地の人々の生活を支えています。

また5月16日から翌年1月10日の期間は大根川の水となり古賀市内の多くの田畑を潤し、工場用水、生活用水として私達の生活に役立っています。

平成19年3月31日発行

古賀市教育委員会